

宮崎汎会員が見た世界の旅・第2部人物編第3話

ソ連最高指導者スターリン首相の生家

ヨシフ・スターリン（1878年から1953年）はソビエト連邦の最高指導者として29年間の長きにわたり君臨した。

1945年ソ連領のクリミア半島ヤルタで、第2次大戦終結後の世界をどうするかについて連合軍の三巨頭が話しあった。ヤルタ会談である。会談に臨んだのはアメリカのルーズベルト大統領、イギリスのチャーチル首相、ソビエトのスターリン首相だった。ヤルタ会談で千島列島はソ連領となり現在の日本の北方領土問題へとつながっている。



ヤルタ会談に臨んだ三巨頭

左からチャーチル・ルーズベルト・スターリン

(写真はいずれもゴリ市のスターリン博物館展示品より撮影)



スターリンの肖像画



豪華なスターリンの毛皮のオーバー

スターリンは権力を握るためライバルや自分に反対する多くの人たちを粛清し、恐怖政治を行った独裁者であった。本名はヨシフ・ジョガシヴィリだが、後自らスターリン＝「鋼鉄の人の意」と名乗った。



旧グルジアの首都トビリシのたたずまい

機会があって2013年ジョージア（旧グルジア）を訪れることができた。同国の首都はトビリシである。かつてマルコポーロが中国へ赴く途上トビリシに立ち寄り世界一美しい町と称賛した。トビリシから76kmでゴリ市に着く。旧ソ連領グルジアの地方都市ゴリ市は人口5万弱、スターリンの生まれ故郷である。ゴリ市にはスターリン信奉者が同氏を記念する博物館をつくり、庭には専用の豪華なお召し列車が展示してある。さらに驚いたことに大きな

建屋にすっぽり覆われて、スターリンの生家が当時のまま保存され大切に残されていたことである。彼の父親は貧しい靴屋で、住居は平屋で大きなベッドと家具だけの簡素な部屋で半地下は父親の仕事場となっていた。

不思議に感じたのは、強大な権力を握りモスクワの広大なクレムリン宮殿に住むようになった独裁

者スターリンが、あばら家の様な決して豊かに見えない生家を当時のまま残し衆人に見せていたことだ。

博物館には彼の誕生を祝い各国から届いた祝いの品々が展示されていたが、権力者に送るにはこんなものかと言った程度の品が並びちょっと意外な感じがした。

また現地のガイドの説明によるとスターリンは文書表現力に優れた才能が有って、彼の書いた詩が教科書にも使われていたそうだ。



スターリンの生家、半地下は父親の仕事場



居室のベッドとテーブル

スターリンは長じてトビリシにある神学校に通うも退学し、ロシア帝国打倒を掲げる革命家の道を選び遂には逮捕されシベリアへ流刑された。のちレーニンの率いるボリシェヴィキ（ロシア語で多数派の意）のメンバーとなり、次第に政治に目覚め権力の坂を登り詰めながら頭角を現していった。資本主義の西側諸国と共産主義の東側諸国はイデオロギーで真っ向から対立し、その度合いを強めチャーチルが演説で表現した「鉄のカーテン」が閉ざされ、その後東西冷戦時代が長く続いた。余談であるが、当時絶大な人気のあったNHKのキャスター磯村尚徳氏と懇談する機会があり、同氏は日本人にはジョークを解するセンスがない。欧米社会では様々な場面でジョークを交えた会話が楽しまれている。彼らはジョークを憶える努力をしている。ジョークは覚えるものだ。そしてごく最近流行りのジョークを披露した。それは当時ソ連のトップが高齢で次々と死去することを皮肉ったものであった。「ブレジネフが天国へ旅立ち、後任のアンドロポフが後を追って天国へ行ったときアンドロポフがブレジネフに、しまった！うっかり下界に眼鏡を忘れてきてしまったと訴えたとき、ブレジネフはアンドロフに心配するな、もうすぐチェルネンコ君が眼鏡をもっておっつけ来るよ」。このジョークは病弱なアンドロポフが死去し、後任のチェルネンコもすぐ死去するだろうと憶測を呼んだ時代のブラックジョークとして流行ったそうだ。

参考までにソ連の最高指導者の名前を列举するとレーニン・スターリン・マレンコフ・フルシチョフ・ブレジネフ・アンドロポフ・チェルネンコ・ゴルバチョフである。ゴルバチョフはグラスノスチ（情報公開）とペレストロイカ（改革・建て直し）をとなえ冷戦時代を終結させた。その後政権はエリツィン、そして現在のウラジミール・プーチンへと受け継がれている。（2013年4月）